長崎の電話

田中貢太郎

青空文庫

京都西陣の某と云う商店の主人は、遅い昼飯を喫って店の帳場に坐っていると電話のベルが鳴った。主人は己で起って電話口へ出てみると聞き覚えのある声で、

「あなたは――ですか」

と云ってこちらの名前を聞くので、

「そうです、あなたはどなたです」

と聞くと、

「わたしは○○です」

と云った。それは主人の弟で支那へ往っているものであった。主人は喜んで、

「お前は帰ったのか」

と云って聞くと、弟は、

「わたしは病気になって、今、長崎の――旅館へやっと帰ったところです、兄さんに、是非会いたいから、どうかすぐ来てください」

と云ったかと思うと電話は断れてしまった。主人は病気の模様を聞きたいと思ったが、電話が断れたので残念でたまらなかった。しかし、病気ですぐ会いたいと云うからには、すぐ往ってやらなくてはいけないだろうと思って、電話口を放れたところで、番頭の顔が見つかったので、

「支那へ往ってた弟が、病気で長崎まで帰って、すぐ来てくれって電話がかかって来たから、これから往って来る、後をよく気を注けてくれ」

と云った。すると番頭が変な顔をして主人の顔を見返した。

「長崎へ電話が通じておりますか」

その時は明治四十三年の八月比のことで、長崎への長距離電話は無論なかった。主人は気が注いて電話局へ問あわしてみた。果して長距離の電話もなければ、今電話をつないだこともないと云った。主人はますます不思議に思ったが、そのままにしてもおけないので、とにかく長崎へ往くことにして、その日の汽車で出発して長崎へ往き、怪しい声が云ったその――旅館と云うのへ往ってみると、病をおして支那から帰って来ていた弟は、兄の往くのを待たないで病死していた。後で詮議をしてみると、電話のかかって来た時は弟が息を引きとった時であった。この話は明治四十三年十月、田島金次郎翁がその時京都にいた喜多村緑郎氏を訪問した際に、その席上にいあわしていた医師某が、真面目な知人の話だと云って話した話である。

青空文庫情報

底本：「伝奇ノ匣6　田中貢太郎日本怪談事典」学研M文庫、学習研究社
　　2003（平成15）年10月22日初版発行
底本の親本：「日本怪談全集」改造社
　　1934（昭和9）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
2010年10月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

長崎の電話

田中貢太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/